＜研究動向＞

日本語教育におけるCLILに関する研究の動向

原　　華　耶
東亜大学　人間科学部　心理臨床・子ども学科
harakaya@toua-u.ac.jp

《要　旨》
CLIL とは，内容言語統合型学習のことであり，1990 年代からヨーロッパを中心に広まってきた言語教育アプローチである。日本語教育の分野においても，近年，CLIL を取り入れた実践教育の報告が多からず見られるようになってきている。
本稿は，最近注目を浴びている CLIL の定義と 4 つの概念について確認・整理した上で，日本語教育における CLIL に関する研究の動向をまとめるものである。

キーワード : 日本語教育，CLIL，内容言語統合型学習

1. はじめに

CLIL とは, Content and Language Integrated Learning の略で，内容言語統合型学習のことである。教科科目やテーマの内容の学習と外国語の学習を組み合わせた言語習得アプローチを指す。この学習方法では，教科内容と言語運用能力の両方を統合させながら学ばせるだけではなく，バランスのとれた多様な学習活動を行わせることができる。

CLIL は，発祥の地であるヨーロッパでは既に広く定着しており，2000 年以降は，タイ，インドネシア，ベトナムなど東南アジアの各国においても導入され, 大きな成果をあげている。日本では CLIL を用いた授業実践は 2010 年頃から始まり，現在文部科学省も CLIL を取り入れることの有効性を指摘している。

2. CLIL の定義・歴史と 4C の概念

2.1　CLIL の定義・歴史

CLIL とは，教科の内容と語学の両方を組み合わせる言語学習アプローチである。ヨーロッパで普及している理科や社会などの科目的内容と言語を統合した学習形態で，歴史は長いが最近注目されてきている（内藤，2015）。

1960 年代にカナダでは，ケベックのフランス語を話す地域に住む英語話者の子どもたちの保護者が,「決められた標準的な教育を受けていたのではフランス語が流暢に話せない」,「彼らが大人になったときに就職などで不利益を被るのではないか」と考え，当局に働きかけて，目標言語で科目の授業をするイマージョンプログラム[1]を導入させた。このイマージョンプログラムは成功例として報告され，カナダ全体からその他の地域へと広がっていった。1970 年になると，イギリスでも言語教育が様々な背景を持つ子どもに対して行われるようになり，科

目内容と言葉の学習及び教育が必要であるという理解が広がっていった。

CLILの名称は1994年ヨーロッパで用いられて以来、ヨーロッパの大学では長年，法学，医学，科学などの分野で，母国語以外の言語による教育が行われた。ヨーロッパでは多言語主義が重んじられているが，バイリンガル教育[2]や多言語教育は富裕層でしか受けられなかった（小山，2014）。

CLILは複言語・複文化主義に基づく教育観のもと，言語を通して平和な社会の実現に必要な汎用能力[3]を育成することを目的とした「内容と語学の組み合わせ」による語学学習法である（元木，2020）。CLILの主な特徴は，学習内容の理解に重きを置き，学習者の思考や学習スキルに焦点を当て，学習者のコミュニケーションの育成や，学習者の文化あるいは相互文化の意識を高める点にある[4]。言い換えれば，習得を目指す言語を用いながら，別の教科や社会的テーマを学ばせることによって，学習者の思考力やコミュニケーション能力，協同学習（ペアワークやグループワーク），異文化理解を高めていく。

教科内容を語学教育の方法を用いて学ぶことにより，効率的でより深いレベルの修得ができる。また，目標言語を学習手段として使うことで実践力を伸ばすことができ，学習スキルの向上も意図されている（内藤，2015）。

2.2　CLILの4Cの概念

4CとはCLILの基本原理であり，Content（内容），Communication（言語），Cognition（思考），Community（協学）という4つの概念を指す。4つの概念を有機的に結び付け質の高い教育を実現できると考えられる（図1）。

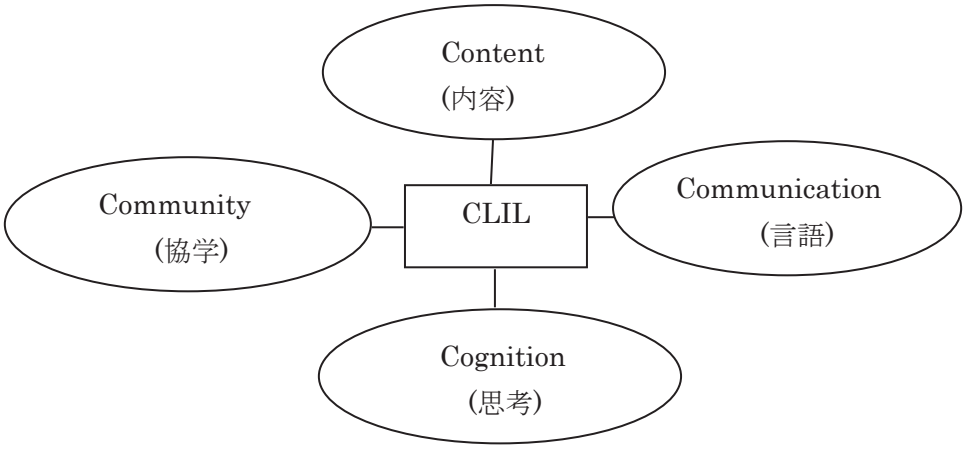
2.2.1
Content（内容）

Content（内容）は教科書の学習テーマやトピックのことで，学習者が授業を通して理解する知識を指す。単一科目による内容にしてもよいし，複数の科目やテーマが重なったものでもよい。CLILにおけるContent（内容）は，学習者の言語学習のための良質なインプットの質と量の確保のために必要不可欠なものであり，同時に「わかる」から「できる」知識を意識して学習することが重要である。Content（内容）は知識やスキルを学習者に与えるだけでなく，知的好奇心を刺激し，関連した内容について興味に沿って知識を深めることが期待される。

2.2.2
Communication（言語）

Communication（言語）とは授業の中で使用される学習言語を示すものである。内容理解を深めるために必須の言語や表現を概念とともに学習することが大切である。Communication（言語）はContent（内容）

図1　CLILの4C



出所：渡辺・池田・和泉（2011）を基に筆者作成

を学ぶ上での手段と見なされ，知識や技能の言語学習と学習を通した言語使用を有機的に組み合わせることにより言語習得が促進される（元木，2020）。

CLILでは必要となる言語スキルが3つに分けられている。奥野（2018）では，① language of learning（言語知識の学習）[5]，② language for learning（言語スキルの学習）[6]，③ language through learning（学習を通した言語使用）[7]という3つの言語を授業設計の段階から計画的に取り込むことが重要であると指摘されている。以下に3つの言語について具体的に説明する（市川，2015）。

language of learning（言語知識の学習）は，内容を理解するために必要となる言語能力を指す。CLILでは，教える内容が授業によって異なるため，それに伴って必要となる言語能力も変わってくる。language for learning（言語スキルの学習）とは，学習を進める際に必要となる言語スキルを指す。CLILでは，学習者がグループワーク，ディベート，プレゼンテーションといった様々な課題を行う上で必須となる言語スキルを身につけることが求められる。language through learning（学習を通した言語使用）は，上記二つをもとに，学習者が課題を行いながら身につける言語能力を指す。学習者が学んだ内容について話したり書いたりすることで理解が深まり，より高度な言語能力を高めていく。

CLILではlanguage of learning（言語知識の学習），language for learning（言語スキルの学習），language through learning（学習を通した言語使用）をバランスよく組み合わせて提供することが要求される。

2.2.3
Cognition（思考）

Cognition（思考）は授業の課題の中で学習者が行う思考活動を示しており，4Cの中で最も重要視される概念である。

Cognition（思考）は，内容を理解したり適応するだけの基礎的な思考力である低次思考力LOTS[8]（Lower-Order Thinking Skills）もあれば，分析したり評価したりするといった高次思考力HOTS[9]（Higher-Order Thinking Skills）もある。授業者はこれらを知ることにより，授業において与える課題がどの程度の負荷を伴うかについて分析し，バランスのとれた学習活動を実践することができる。

表面的な理解，低次思考力LOTS（Lower-Order Thinking Skills）から深い理解，高次思考力HOTS（Higher-Order Thinking Skills）へと思考力を伸ばしていくことが可能になると考えられる。

2.2.4
Community（協学）

Community（協学）は，「協同学習」や「地球市民意識」を意味する。学習者が意見を交換し、共に学ぶために，教室内で行われるペアワークやグループワークは狭義のCommunity（協学）である。また，「地球温暖化」，「貧困問題」や「食料問題」などといった国際問題，異文化理解をトピックとして扱う際には，広義のCommunity（協学）とされる。

教室での協同の学びを中核として，世界の文化や国際理解についても学びを広げることにより，様々な文化や世界の生活などについても学び，他者を認め，さらには自国の文化や言語の理解を深めることを目的としたものである（池田，2011）。

3. 日本語教育におけるCILIに関する先行研究

笹島（2011）によると，2008年の調査ではCLILはほとんどのヨーロッパの言語教育に取り込まれていると報告され，様々な言語において既に多くの実践がなされている。一方，日本語教育におけるCLILについては注目されはじめてからまだ日が浅く，教育現場においてその実践が取り入れたのは最近になってからである（深川，2019）。これまでの日本語教育におけるCLIL実践研究についてまとめる。

佐藤・宮本（2014）は，日本語教育における読解・作文の授業へのCLILを導入した実践について報告している。CLILのアプローチの授業は，作文や読解だけではなく，日本語能力の向上にもつながったと述べている（佐藤•宮本，

2014)。佐藤・柴田（2016）では，SFAをビジネス書で学ぶ総合クラスの事例を基にCLILの実践について述べている。佐藤・奥野(2017)は，上級日本語学習者を対象に「貧困問題」をテーマにしたCLILの授業実践を報告している。宮島（2017）は，日本の大学の法教育センターでの日本語教育と法教育をCLILで行った実践について報告している。奥野（2018）はCLILによる日本語授業の実践例を紹介するものである。奥野（2018）は，CLILによる日本語授業の実践例を述べている。また，音声教育をつなげるために，CLILなどの言語教育モデルの枠組みについての研究も行われた（王，2017)。

また，日本社会，日本文化という異文化への理解と適応という視点から設定された「日本事情」科目においても多からず研究がなされてきている。日本社会・日本文化・日本人を理解する視点を得ることを狙いとし，歌舞伎と茶道を選定し,CLIL理論の可能性を検証する研究（清水，2016),「日本事情」科目の授業設計においてCLILの教育方法を取り入れ，その有効性を明らかにする研究（元木，2020)，さらに，地域の文化や歴史を主題として，CLILを取り入れた授業の実践報告（深川,2019）などがある。

4. おわりに

本稿はCLIL理論についてまとめ、日本語教育におけるCLILに関する研究を調べてきた。これまでCLILの有効性について多くの研究がなされてきている。CLILを取り入れた授業で，学習者の興味・関心を引き出し，内容を理解させると同時に，理解した内容を運用できる力を身につけさせるのは一番大きな魅力だと感じられる。

筆者は今後の教育活動の中で,「日本事情」科目の授業を設計する際に、CLILの指導法を導入し，その可能性・方向性について実践・検証していきたいと考える。

注

1 イマージョンプログラムは多数言語話者を少数言語話者の言語環境に置き，学習していく形態であり，未修得の言語を身につける学習方法の一つである。

2 バイリンガル教育といっても言語や文化，社会に対する考え方が様々であるため，その方法や目的は多岐にわたっている。少数派言語団体の同化を優先させるものもあれば，言語の多様性を重視し多文化主義を目指すものもある。また，家庭での使用言語，学校の授業での使用言語，地域社会での使用言語，そして国際的・地域的に見た言語の地位など，考慮されなければならない複雑な要素を持つ。

3 汎用能力は，人間関係形成・社会形成能力，自己理解・自己管理能力，課題対応能力，キャリアプランニング能力で構成される。この4つの能力は，それぞれが独立したものではなく，相互に関連・依存した関係にある。

4 日本CLIL教育学会によるもの。CLILとは｜J-CLIL｜日本CLIL教育学会（2021年6月1日閲覧）

5 language of learning（言語知識の学習）：テーマに関する重要語彙，表現，必須文法項目等。

6 language for learning（言語スキルの学習）：資料の読み方，説明・質問・議論の方法，レポートの書き方等。

7 language through learning（学習を通した言語使用）：言語知識・言語スキルを習得させる方法,具体的には,情報のインプット，グループワーク，発表，ディスカッション等がある。

8 低次思考力LOTS：記憶・理解・応用がある。

9 高次思考力HOTS：分析・評価・創造がある。

参考文献：

- 市川新剛（2015)「CLIL内容重視型教授法の特徴とその効果」名古屋学院大学論集 言語・文化篇　第27巻　第1号　pp.51-57

- 王伸子（2017）「教育言語モデルCBI、CLILの枠組みと大学における日本語教育―音声教育につなげるために―」専修国文第100号pp.1-13
- 奥野由紀子（2018）「日本語学習者を対象とした内容言語統合型学習（CLIL）―第二言語習得の視点から―」ワルシャワ大学　ポーランド日本語教師会
- 清水順子（2016）「CLIL理論に基づいた「日本事情」の可能性―伝統文化から現代日本を理解する試み―」北九州市立大学国際論集14，pp.147-155
- 小山久美子（2014）「英語教育におけるCILI的アプローチによる教授法の研究」川村学園女子大学研究紀要　第25巻　第1号pp.1-15
- 佐藤雅彦・宮本律子（2014）「CLILを用いた日本語教育の試み―中級読解・作文クラスでの事例―」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要　第36号，pp.139-150
- 佐藤雅彦・柴田健（2016）「CLILを用いた上級日本語教育の試み―SFAをビジネス書で学ぶ総合クラスの事例」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要　第38号，pp.221-232
- 笹島茂（2011）『CILI新しい発想の授業』三修社
- 内藤徹（2015）「CILIを利用した英語教育」仁愛女子短期大学研究紀要第47号pp.7-15
- 深川美帆（2019）「CILIを取り入れた日本語授業における学習者の学びについての一考察」第5回スペイン日本語教師会シンポジウム発表論文集　pp.101-106
- 元木佳江（2020）「留学生に対する「日本文化・日本事情」の授業設計―CLIL（内容言語統合型学習）の視点から考える―」鳴門教育大学国語教育学会　語文と教育　第34巻pp.92-103
- 渡辺良典・池田真・和泉伸一（2011）『CLIL（内容言語統合型学習）上智大学外国語教育の新たなる挑戦第1巻原理と方法』上智大学出版